

真実と〈超越真実〉のはざままで

デジタル情報過多社会の濁流にのみ込まれないために。



事業構想大学院大学名古屋校

統括教授 **スティーブ・モリヤマ**

今年の言葉

『オックスフォード英語辞典』。英語辞典の世界的権威として、英語圏の人々が真っ先に思い浮かべるのがこの辞書であろう。筆者が毎年暮れに楽しみにしているのが、この辞書を刊行するオックスフォード大学出版部が発表する【Word of the Year】「オックスフォード英語辞典が選ぶ今年の言葉」である。選定基準は、「1年間を通して“ethos, mood, or preoccupations”（社会全体を覆う空気、心性、価値観など）を如実に反映し、持続的な文化的意義を包含する単語または表現」とのことで、急速に変わりゆく世界の潮流の中で、日本では**ほうはい**（**ほうはい**）**胎児段階**の変化の息吹を、一足早くつかむためのヒントとして参考になっている。

以前はイギリスとアメリカで選定した単語を各々発表していたが、デジタル化の進展で英米の差異が小さくなってきているせいも、ここ10年以上、英米共通で1つの単語が選ばれている。その中でも2016年に選ばれた post truth 〈超越真実、ポスト真実〉という言葉に、筆者は注目している。

2016年といえば、英国で Brexit（欧州連合離脱）の可否について国民投票が行われ、米国では大統領選でトランプ氏が勝利した年である。読者の皆さんのご記憶にあるように、あの年は、そうした2大イベントの中で、玉石混交の情報が世界中で飛び交い、混乱と混沌こんとんの砂嵐の中で、

英米において大きな意思決定がなされた年だった。

それから7年の月日を経た2023年に、今度は米国の権威ある英語辞典である『ウェブスター辞典』が「今年の言葉」を発表した。彼らを選んだのは authentic（本物の、真実の、真正銘の）という単語で、この形容詞が選ばれたのは、さらに深化した post truth 〈超越真実〉社会に対する警鐘のように感じられた。

情報消化不良と負の伝言ゲーム

インターネットや SNS が普及するまでは、「情報をもつ者」と「情報をもたざる者」の間にそびえ立つ非対称性の壁は、とてつもなく大きなものだった。発信媒体や手段も、もつ者が独占しており、もたざる者が世論に直接影響を与えるには相当な困難を伴った。

ところが、生成 AI を含むデジタル・インフラの拡大と携帯情報端末の普及の結果、これまで情報をもたなかった者たちが、容易に膨大な情報にアクセスできるようになり、SNS 等、様々なインターネット媒体を通して、不特定多数の人々に個人の主張を直接届けることができるようになった。

だが、過ぎたるはなお及ばざるがごとし。アクセス可能な情報が多すぎる状態は、人間にとって良いことなのか。多くの人々が情報消化不良を起こしているのが、現代社会の素顔と言えるのではなかろうか。